

少年少女小説



傑作選

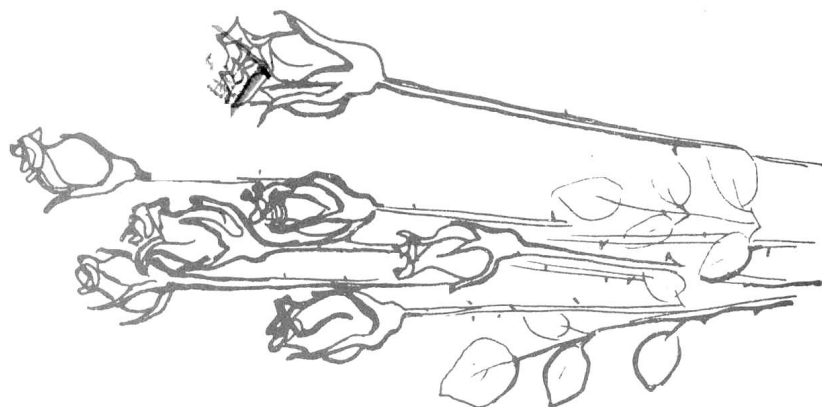
空中アトリエ

武川みづえ



空中アトリエ

武川みづえ



NDC 913

少年少女小説傑作選

空中アトリエ

実業之日本社

たけかわ
武川みづえ著

1974年

208ページ

21.5 cm

本文10ボ活字使用

小学校上級～中学生むき

検印省略

空中アトリエ

1970年3月15日 第1版第1刷発行

1974年1月20日 第2版第1刷発行

1979年3月1日 第10刷発行

著者 武川みづえ

発行者 増田義和

発行所 実業之日本社

● 104 東京都中央区銀座1-3-9

TEL 03(562)4311 振替東京1-326

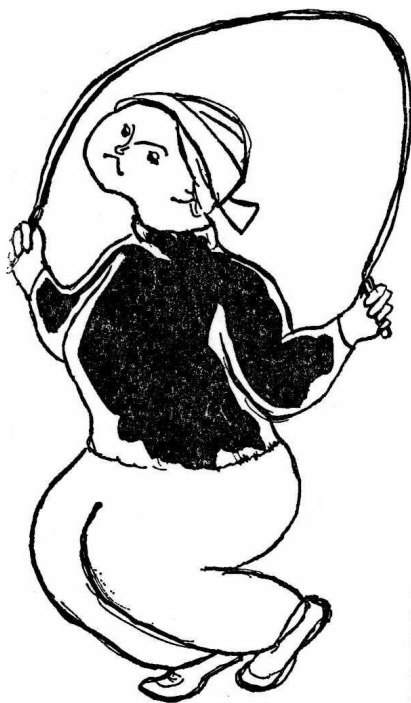
印刷所 株式会社 東京研文社

© Mizue Takekawa 1974, Printed in Japan

8093-255060-3214



●もくじ



ノ えのぐの齒みがき

♪ 花のおばあさん

♪ メイヤンばらに水やるときは

♪ 油ダイ白ハク花

5 なわとび

6 生きるしるし

7 びわの実事件 じけん

8 ママは迷信や めいしん

9 さびていたくぎ

10 盲腸づり もうちよう

11 モデルチェンジ

12 ばらの秋

13 空中アトリエ

あとがき

●この本の絵をかいた人

いしざき すみこ

神奈川県鎌倉市生まれ。東京芸術大学油絵科卒業。子どもに絵を教えるかたわらさし絵などでも活躍。主なさし絵の仕事に「つばめの家」「ゆびすいキョン」などがある。日本児童出版美術家連盟所属。

そうてい

村上美術



1 えのぐの菌みがき

学校から帰ると、台所入口の、のれんの下に足が二本ぶらさがっていた。

“ママは、空中アトリエ”、のしるしだ。

ユリは、下くちびるをつきだして、首をふった。氣にいらないうきの、ユリのくせだ。

みじかいワンピースからのびすぎた手足、小麦色のくりくりした顔に、小さいあごが、とんがっている。大きな目玉を、くるとひとまわりさせたユリは、ぶらさがっている二本の足を、にらみつけてっ立つていた。

台所のまん中に、^{きまたう}脚立をすえて、クッションをのせてこしかけたママは、絵をかくのに夢中なのだ。

とだなの上、黒いエナメルでぬられて、光っているアルミのおぼんに、ママの道具がならんでいる。

えのぐ、^{ふでた}筆立て、パンのかたまり。レモン、びわ、いちご、バナナ、夏みかんなどをもったクリスタル

のフルーツざらと青い花びん。

長いあしのイーゼルのてっぺん、てんじょうに近いキャンパスに、目をすえるママ。

「空中アトリエ人」になってしまったママを、地上につれもどすのは、たいへんなことだ。

絵をかいているママには、なにをいってもきこえないし、やらなければならないことなんか、みんなわすれてしまう。いてもいないのとおなじだ。

——でも、これは、チャンス、しめたっ——

ユリは、小さくしたをだして、首をすくめた。

しめたっ！　と思ったのは、理科のテストが、十題のうち半分まちがえて、五十点だったからだ。学校から家まで、五十点のテストは、ランドセルの中で、鉄板てつばんのようにおもかった。空中アトリエのママをみつけたとたん、テストは、なんでもない一枚の紙きれにかわった。

「ママ、理科のテスト五十点、五つまちがえちゃった、へへへへっ。」

大きな声で報告ほうこくした。

ママのへんじは、思ったとおり、

「ふん、そう、よかったわね。」

だった。きれいに半分まちがえるなんて、めったにできることではない。まったく、「よかったわね。」と、いうものだ。

ユリは、また、下くちびるをつきだす。



おなが、ぐうぐう鳴りだしたのだ。

きょうは土曜日、給食のない日だ。ママはちゃんと、お昼ごはんの用意をして、おなかをすかせて帰ってくるユリを、まっているべきなのだ。

空中アトリエのママには、おひるもおやつも関係ない。絵がかきあがるまで時間がとまって、ママをまわっていてくれると思っているらしい。

ユリの土曜日はいそがしい。一時から三時まで、ピアノ教室とそろばん塾じゆくに行く。三時から夕方まで、ドッジボール、リンボー、なわとび……。スケジュールは、ぎっしりつまっている。おひるに栄養えいようをつけておかないと、まいってしまう。

——しっかたない。インスタントラーメン月見にでもするか——。

ママのさぼりやは、めずらしいことではない。あきらめよくユリは、セルフサービスのかくごをきめた。「えいっ、これでよしっ。」

思いがけずはやく、ママのさいごの筆ふでがきまったようだ。

「あら、帰っていたの、はやびきなの？」

土曜日は、お昼で帰るのが、あたりまえだ。とほけないでもらいたい。

へどこかしら。

というように、ママは、ユリの顔とキャンパスを見くらべる。

「レモンの味は、とんがったひし形、いちごは、上がまるくて下が三角、びわは、まんまるの味……。」
ママがうたう。

みずみずしくだもの色の、モザイクだ。ひんやりつめたい感じが、光る風をはねかえした。
「いい色ね、おいしそう。」

まじめな顔で批評したユリのおなが、ぐううと鳴り、ママのおなが、くううと鳴った。
インスタントラーメンでない昼ごはんにありつけそうだ。ありがたいことだと、ユリは思う。

ママの空中アトリエ、ユリは気にいらぬ。

空中アトリエのママは、わずか一・五メートルほどの脚立きだちにのぼっているだけなのに、ユリには手のとどかないところに、いるような気がするのだ。それは、空中アトリエが建設されたときの、くやしい思い
出に、つながっているからかもしれない。

ユリは四つだった。

ユリが見あげる高い高いところ、ユリの手のとどかないところに、ママの足のうらがあつた。ママが、
ユリのママが、手のとどかないところにいるなんて、ユリには、がまんできなかった。ユリは、なきわめ
いた。

口の中にひろがった、油くさいえのぐのにおいがよみがえる。

——だってさ、小さい赤ちゃんだったんだもん——。

ユリは、心の中で弁解^{べんかい}する。

なん回もきかされる、きまりわるい事件^{じけん}だ。

空中アトリエなんか、ぶっこわれてしまえと、心の中でわめくわりに、ユリは、口にだしてあまりもんくをいわない。それは、わるい点のテストの報告^{ほうこく}が、かんたんにできることのほかに、空中アトリエ建設について、うしろめたいような、いきさつがあるからだ。

ユリは四つ、赤ちゃんとはいえないが、とにかく小さい女の子だった。

ママって、ユリのためにだけ、いるのだと思っていた。

ママが絵をかくなんて、へんだと思った。

ユリといっしょに、お話しながらかいてくれるのならいいけれど、ママの絵は、そうでないのがおおいのだ。だまって、自分ひとりでかくのだ。

ユリがなにかいっても、絵をかいているママは、こたえなかったり、とんちんかんなこたえだったりする。ユリ、そんなママ、大きらいだ。

ユリがおひるねから目をさますと、ママはベランダで、ユリにせなかだけ見せて、絵をかいていた。ママのせなかは、むつつりとだまっていた。ユリは、おひるねのあとで気持ちがよくて、わらいたいのに、

大きな声でうそなきした。おしっこもおしえないでしちゃった。ご本もやぶった。ママのかがみのまえのクリームをいっぱい顔につけた。そうするとママは、なきそうな顔をして、ユリのところにもどってきた。ユリは、小さい歯ブラシを買ってもらった。笛がついたすてきな歯ブラシだ。ユリは、歯をみがくのが、大すきになった。

ママったら、小さい歯みがきを、たくさん持っているのだ。ユリは、それまで知らなかった。ほそ長い木のはこにはいっている、赤や青や緑のチューブ。ユリは、歯ブラシに、赤と緑の歯みがきを、しばらくした。歯をみがいた。

へんな味の歯みがきだった。それに、口の中がべたべたして、いやなおいだ。ユリは大きな声でなきわめいた。

えのぐだらけの口でなきわめくユリに、ママのほうがびっくりした。あわててユリをかかえると、歯医者さんにつけた。はだしだった。

にもつみたいに、ママにはこばれてきたユリは、口じゅうえのぐだらけにして、ないていた。はだしのママは、まるい鼻の頭にえのぐをつけて、あせをかいていた。

とびこんできたママとユリを見た、わかい看護婦さんは、なみだがでるほどわらって、先生にしかられた。その先生だって、いっしょうけんめい、わらいをこらえていた。

ユリの歯にこびりついた、赤や緑のえのぐをとりのぞくのは、たいへんなことだった。めったにない例

なので、学界に発表する論文を書くために、ユリのカルテをたいせつにしまっておくことにしたそうだが、カルテをとりだすたびに、先生はわらいだしてしまうので、いまだに論文をまとめられないということだ。

「おかあさんは、気をつけなくてはいいけませんな。」

と、歯医者さんにしかられて、はずかしかったママは、もう二どと、こんな目にあいたくなかった。ユリだって、えのぐで歯をみがきたいなんて、思ったわけではない。

「えのぐ、おかなければいいのさ。」

パパがいった。ママは、かなしかった。

そのとおりだ。えのぐがなければ、おこらなかつた事件だ。でも、えのぐのない、絵をかかない生活なんて、ママには考えられないのだった。ずっとずっと、かいてきたのだから。かくことが、生きることだったような気がするママだ。

ユリのせわをしながら、ユリにいたずらされないで絵をかく方法を、ママは、いっしょうけんめいに考えた。

まるいひざを、ぼんとたたいたママは、物置から脚立をだしてきて、ほこりをはらった。イーゼルの足につき木をして、高くした。キャンパスは、てんじょうに、とどきそうになった。



「空中アトリエだ！」

ママは、鼻の頭をこすって、つぶやいた。

脚立きやたちの上に、すわりこんでしまったママを、ユリはびっくりして見あげた。

ママは、高いところのぼってしまった。ユリの手のとどかない遠くから見おろしているママ、それは、ユリのママとちがう人のようだった。

ユリは、こわかった。いっしょうけんめい手をのばした。指のさが、やっと、その人の足のうらにとどいた。ママならくすぐったがりやなのに、その人は、ユリが

くすぐつても、知らん顔だった。

——ママが、へんな人に、かわっちゃった——。

ユリは、手をにぎりしめて、^{きたち}脚立をたたきながら、ないた。

ママは、足のうらをくすぐるユリの、小さい指と、なき声に、まけないように歯をくいしばって、キャンバスをにらめていた。キャンバスに、自分をぬりこめてしまいたかった。

ユリのなき声が、遠くなった。

ママは、少女をかいていた。それは、大きくなったユリかもしれない。はやく大きくなってほしいという、ママのねがいだったかもしれない。

デッサンができて、ほっとしたママは、空中アトリエからおりた。アトリエの下に、ユリが、なきつかれてねていた。なみだでよごれた顔だった。そして、^{ゆめ}夢の中でもかなしいのか、目じりに、なみだのつぶが光っていた。

ママの目に、なみだがあふれて、ユリの顔におちて、ユリのなみだといっしょになった。

ユリが、ぽかっと、目をさました。ママを見てにつこりわらったが、きゅうに心配そうに、うすいまゆをよせていった。

「ママ、どうしたの。だれがいじわるしたの。かわいしょう。ユリが、めって、してあげる。」